

に最低血圧の推移を追及することにより、妊娠中毒症の早期診断、並びに予後を知ることが出来る。一方本疾患の本態解明の一助になるものと思われる。

124. 妊娠中毒症予知法の一つとしての 指尖容積脈波計検査

(東芝鶴見) 星合久司

(東大) 田中敏晴, 本多 洋

末梢血管の動態を知る試みとして指尖容積脈波計を改良して、その波形についての観察を創め、その臨床的応用面を開拓したことは先に星合が日産婦誌第13巻第9号に発表した。

その後の課題として、1) 装置の一層の改良 (簡便化)。2) 波形分析法の更に詳細な検討。3) 臨床応用面の開発。の3方面に亘って検討を行つた。

I. 装置について。①新たに光源光量調節装置をつけて、光量を加減し、厚い足趾の脈波もとれる様にした。② Gain を2段式にして振幅調節の幅を広くした。③前の器械よりも軽便、体裁も良くなった。

II. 波形分析法について、先に発表した脈波の類型を基にして、更に多数例を検討して、波形の図鑑を作成した。約4000例について、大体殆んど全部この中に属することが認められた。今回は大きく正常異常の2群に分けて、臨床成績を検討した。

III. 臨床応用について ①妊娠初期から逐次波形をとり、中毒症発生率を検討した。妊娠8カ月の波形について、正常波の6%, 異常波の85%が晩期妊娠中毒症に罹患した。本検査を中毒症予知法の一つとして用いれば或程度警告的意義があると考えられた。②異常波殊にC波を示したものの未熟児発生率は20.2%, 30.8%と正常波の6.4%に比し有意に多かった。児死亡についても同様の傾向が認められ、母児の予後に対し本検査が何らかの示唆を与えることが考えられた。

125. ATPの妊娠中毒症に対する効果に就て

(三楽病院) 唐沢陽介, 真田幸一

寺門運雄, 緒方健次郎

近年 ATP (Adenosine Tri-phosphate) の生体内に於ける生化学的役割が次第に明らかにされ、又外部より投与されたATPの各科治療面における意義についても数多くの研究がなされて来た。殊に腎炎、ネフローゼ、或はネフローゼ加味腎炎等の腎疾患群に関する内科及び小児科領域に於ける業績には見るべきものが多く、基礎的にも臨床的にもATPの効果証明されている様であ

る。

我々は此の度、ATPを妊娠中毒症患者に投与し、一部に効果を認め得たので報告する

◎ 投与対象

① 三楽病院産婦人科外来を訪れた晩期妊娠中毒症患者及び

② 同上、病室に入院せしめた比較的重症の中毒症患者

◎ 投与方法

① 外来患者ではATP 20mg 1日1回筋注14日間

② 入院患者では同上30mg 14~21日間

◎ 症状別効果

(1) 浮腫: 投与開始後1週間で大部分の患者が減少

(2) 血圧: 多く浮腫の減少より稍遅れて認められ、少数例では無効。

(3) 蛋白尿: 減少又は消失するものでは投与開始後、約8~9日で効果が認められる。

◎ 有効率、約70%

126. 妊娠中毒症後遺症に対する新しい検討 (第II報)

(東京警察) 田中敏晴, 藤崎雅子, 深山真一

(東大) 塚田一郎, 星合久司, 本間恒夫

小林 博, 宮原 忍, 加賀谷武

町田純一, 本多 洋, 福田鉄雄

(国立癌センター放射線科) 松平寛通

(東京日立病院眼科) 下山順司

我々は既に第13回日本産婦人科学会総会に於て本問題に就き論じ、高血圧因子の重要性を強調した。今回はこの高血圧遺残が、妊娠中の経過とどの様な関係にあるか、更に遺残例では病態生理学的に或いは機能的に血管系、腎臓に如何なる変化が見られるか、その実態を把握する目的で、統計的観察に加え、次の様な新しい検討法を用い追究を行つた。その成績を要約すると

1) 腎生検: 後遺症遺残例では毛細管基底膜に膨化があり、Vas afferens に硝子様乃至フィブリノイド変性を示す壁が見られ、それに所属する糸球体が腫大し、毛細管 Schlinge の内腔が狭窄化を示す場合が多い様である。

2) Renogramの検討: I^{131} -Hippuran 20~30 μ c, Hg²⁰³-Neohydrin を用いた。成績は、後遺症が可成り重症でも本検査では殆んど異常曲線は見られず、腎及び尿管機能は正常範囲にあつた。